

### 【第3部】アーカイブスの【データを世界に発信する】

【司会】 それでは、ただいまより、シンポジウムの第3部に移ります。第3部は「アーカイブスの【データを世界に発信する】」というタイトルで進めたいと思います。

ご登壇いただいている方をご紹介します。関西学院大学の畑祥雄先生。

【畑】 畑です。よろしくお願いします。(拍手)

【司会】 続きまして、先ほどもお話いただきましたが、東北大学大学院の今村文彦先生。

【今村】 今村です。(拍手)

【司会】 それから、東京大学教授の吉見俊哉先生です。

【吉見】 吉見です。(拍手)

【司会】 そして、今回、アメリカのハーバード大学ライシャワー日本研究所から、アンドリュー・ゴードン先生にお越しいただいております。(拍手)

ゴードン先生は日本語ペラペラですので発言にはご注意ください(笑)。

ここの司会を、朝日新聞社でサイエンス映像学会の理事をされている徳山喜雄さんをお願いいたします。



【司会(徳山)】 失礼します。(拍手)

それでは、シンポジウムの第3部を始めます。まず、1部と2部の感想、コメントをいただき、同時にアーカイブスについて考えておられることを発言してもらいます。

まず、今村先生、第2部に続いてお疲れと思いますが、ぜひよろしくお願いします。

#### 「東北大学みちのく伝震録」を立ち上げた

【今村】 感想というよりも、少しPRをさせていただきたいと思います。「まるごとアーカイブ」に加えまして、東北大学では「東北大学みちのく伝震録」というアーカイブを、一緒にパラレルで立ち上げさせていただきました。まず、大学という組織は何ができるかというのを考えました。従来、理工中心の防災研究、または減災研究でありましたけれども、やはり社会学、情報また歴史というものが必要だということを再認識し、トータルの専

門の視点から今データを集めているところです。先日、やっとホームページも立ち上がり、平仮名で「みちのく」、でんしんろく（伝震録）は伝えるの伝、地震の震に記録の録になります。



立ち上がったばかりではありますが、先ほど第2部の紹介で、最初に皆さんに見ていただきました実際の被害の詳しい情報、それを使った今後のハザード評価、またそれをどう政策または復興、まちづくり、ゾーニングに使えるだろうかというような議論も含めて入りつつあります。我々のアーカイブも過去を教訓としますと、どうも神戸や新潟のときも、大学でつくったアーカイブはあまり残っていないようですね。図書館は別ですけども、最初に狭い視点で集めてしまって、

その後ニーズがないという実態があるそうです。我々の大学もニーズが変わって使われな

いことのないように、どんどん変化していきたいと思います。

【司会(徳山)】 ありがとうございます。第1部からニコニコ動画で放映しておりますが、先ほど聞きましたら、現在3万2,000人以上の方がこのシンポジウムを視聴しているそうです。会場は150人ぐらいですが、大変多くの方が関心を持ってこのシンポジウムを聞いておられます。

じゃあ、関西学院大学の畑さん、お願いします。

### デジタル化しても現物保存は大事

【畑】 関西学院大学の畑祥雄です、よろしくお願ひいたします。

1部、2部とずーっと聞いておまして、本田市長さんの思い、亡くなられた方たちの悔しさというのを聞いて、非常にこちら胸がジーンと来ました。これをきっかけにどういうふう



うふうに日本の新しい形というんですか、それにつなげていけたらいいのかと改めて思いを強くいたしました。

その中で吉見先生が、アーカイブというのは実は現物保存が大事なんだと言われたことです。デジタルアーカイブという言葉で、すごくきれいごと

ら、写真とか映像の弱さというのを一番よくわかっているつもりです。現物がない限り、写真とか映像っていうのはほとんど力をなさないときもあります。

いったんデジタル化したから現物を捨てたらいいというような発想も、1980年代当時、データベース化ということがとても話題になったときに、そういうことが言われました。私は1982年ごろからデータベースの研究とか、デジタルアーカイブの研究をやり始めておりました。私が薫陶を受けた先生が国立民族学博物館の梅棹忠夫先生ですので、梅棹先生から写真とか映像のデータベース、アーカイブ、それもデジタルアーカイブがいかに大事か、といったことをこんこんと言われておりました。そういう中で、1990年に大阪でありました花の万博で、花博写真美術館というものをつくって、デジタルアーカイブの非常に大きな活用といったことに取り組みました。

### 著作権問題は棚上げしてもアイデアを出そう

そのときもアプローチの段階で非常に苦労したのが、日本の場合には入口で著作権問題が発生し、それを延々と議論して結局何のアイデアも出さずにもうみんな疲弊してしまう、というような悪弊がありました。そこで私たちは、著作権問題はすべて出口で考えよう、契約の問題として取りあえず棚上げして、それよりも一番最初に何をするのか、どういうふうにやっていくのか、どんな発想ができるのかをみんなでアイデアを出し合おうよ、ということで考えました。これがデジタルアーカイブをずっと長く研究してきた私の、一つの大きな教訓であります。

### 自分たちで新しい産業構造を興していく

それから、95年には阪神・淡路大震災があり、私たちは関西ベースの所でさまざまなボランティアをして、いろいろなことをやってきました。その中から教訓を得たことをここでもご披露しておきたいのは、それから約10年間、兵庫県、阪神には多大な復興支援補助金というのが下りました。それをやるためにいろいろなプロジェクトが起りましたが、10年たって補助金が切れた途端に神戸がはたと気づいたのは、何の産業も興せなかったということなんですね。そして補助金が切られるのと同時に、神戸に来ていろいろなアイデアだとかプロジェクトを起こしていた人たちが、水を引くようにどこかに消えていってしまった。残された神戸には全く新しい産業構造が生まれていないことを、今回も一緒に教訓にさせていただきたいなと思いました。

そういう非常に悔しさというものから、この東日本では何か復興するということだけでなく、新しい産業というんでしょうか、新興するというんですか、そういった要素も絶えず持っていないと、そして伝統的な継続性がないからこそできるといったことがあると思うんです。復興することの大切さを心の中にきちっと持ち、亡くなられた方たちの悔しさをお腹に入れながらも、全く新しい産業構造を興していくんだという強い気概、それを地元の人たちの手でやり遂げる、地元の人たちが中心になってやる。けども、地元の人たちだけではできないことがあると思いますので、地元の人たちが自分たちで選択して、どここの人と協働してやろうということを選ばれて、パートナーシップを組んでやっていかれることが、とても大事なことなのかなと思っております。

### **マルチな編集能力を持った人材を育てる**

また、私たちはマルチプル電子図鑑というんですか、その全く新しい開発をいたしました。そしてNHKがつくられた「大科学実験」という、非常に大きな国際共同制作番組がありますが、去年から1年かかってマルチプル電子図鑑に替えるという技術開発をやり遂げました。その技術開発ができたというのも、日本の中ではどこのプロダクションも、放送局も、どこの出版社もできなかったものが、実は大学の中でもう8年も前からカリキュラム開発をして、そのための人材育成をやってきたということなんです。

マルチプル電子図鑑というのは、後ほど防災のサンプル版、プロモーションビデオのようなものがつくってありますから、それをお見せいたしますが、そういうことをやるにはやる主体の人物が誰なのかがとても重要です。マルチプルというからには、私たちの大学では映像教育をするときに、まず企画をつくれること、シナリオを自分でつくれること、ビデオカメラ撮影が自分でできること、撮ってきたビデオカメラの映像を自分で編集すること、音楽も自分でつくること、コンピューターグラフィックスも自分でつくること、そして映像デザインも自分ですること。一人の人間に全部マルチプルなテクニカル的なものを、思想とともにきちっと1年生のときから徹底してトレーニングしてしまう。それでも大学院に行って2年間、全部で計6年間ぐらいしないと人は育っていかないわけですね。

### **日本にはサイエンス映像学会が必要**

これから重要なことは、「311まるごとアーカイブス」でたくさんいろいろな現物資料が集まってきます。これは吉見先生が言われたようにものすごく重要なことで、現物を

とにかくきちっといつまでも保存するという、強い意志を持つことです。

次に大事なことは、きちっと特集を組んで編集するという事なんです。編集をしない限り、まるごとアーカイブしたものをまるごと出すということにはできない。そのまるごとアーカイブしたものを、必要に応じて特集のコンテンツを組みながら、それをデジタル化していく。そこに必要な能力とは一体何かといえば、編集能力なんです。その編集能力をどうやって身に付けるのか、これ、大学教育の中で編集能力ってカリキュラムにないんですよ、教えていない。プロデューサーになるためのカリキュラムがあるのかといったらないです。ディレクターになるための、編集者・エディターになるためのカリキュラムというのが、日本の大学で教えているのかといったら、ほとんど教えておりません。

そういう中で私たちは、関西学院大学のサイエンス映像研究センターが中心になって、日本にはサイエンス映像学会が要るということを出したんですね。なぜかという、テレビ局で番組をつくる人たちと、学校で使う先生たちと、ノーベル賞をとるレベルの研究者たちが、同じテーブルの上で話ができる関係性がなかったんです。そこで、養老孟司さんに会長になってもらって、徳山さんと私と、そしてNHKの「驚異の小宇宙 人体」をつくった林勝彦さんというプロデューサーとで、5年前にサイエンス映像学会をつくりました。

そのサイエンス映像学会で今年の7月に学会発表したときに、長坂先生に来ていただいて、防災の件についてお話をさせていただきました。そうすると、点と点で会った人が、非常にするするするっとつながっていくんですよ。これは東日本大震災があって、日本自体がもう何らかの形で変わっていかざるを得ない状況に来ている、今求められているのは、僕はスピードだと思うんです。スピードを速く何かサンプルを出して、みんなでそれを使いながらバージョンアップしていく、そういった思想を持たないと新しい産業というのは興っていかないのではないかと。

### 東北地方に防災マルチプル電子図鑑の制作ラボをつくろう

最後に一つだけ言いますと、きのう長坂先生と一緒にいると、あっという間に物事が決まってしまうと、自動車教習所に連れて行ってもらったんです。自動車教習所でマルチプル電子図鑑の世界的な図鑑をつくるための制作ラボを、自動車教習所の敷地の中にそれをつくるのが一番いいという話になったんですね。

それは、今までの僕の感覚には全くなかった。日本の人口が減っていくと、自動車の免

許を取る人はもう絶対的に減っていくわけです。だけど自動車教習所には非常に大きな敷地があり、そこには教室、駐車場、送迎バスもあるんですね。そうすると、この東北地方に世界に通じる防災のマルチプル電子図鑑、ICTの産業をシリコンバレーのようにつくりたい、1つの大きな夢を持つことができる。日本中から世界中からそういう新しいICTの拠点づくりをするんだ、ということで人を迎え入れる。その場所になんと教習所の敷地内にラボをつくるといったことがとても素敵なことなんだな、ということでわかりました。

こういうふうには、アイデアがアイデアをつなげていくといったことの素晴らしさが、実はこの東北に来ればできる、だから皆さん東北に1回来てくださいといったことを、今日は一貫してお伝えしたいなと思っております。

【司会（徳山）】 どうもありがとうございました。では、東京大学の吉見先生、先生はもう大変長く深くアーカイブスのことを考えてこられた方ですので、よろしくお願ひします。

#### 記憶の主体、記録の主体は誰なのか

【吉見】 吉見でございます。まず、最初にぜひ申し上げたいと思ったことは、先ほどの第2セッションの後半だったと思うんですけども、釜石市の野田市長がご発言されたことに、私、大変感銘を受けました。野田市長がおっしゃったことの中で、映像は大変インパクトがあるんですけども、でも、それが記憶なんだろうか、記録なんだろうかというお話があったと思います。そこで問



われたことは、映像、あるいは情報といってもいいかもしれませんが、その主体は誰なのか、誰が編集するのかということが非常に重要であるということです。記憶の主体は誰なのか、記録の主体は誰なのかという問題です。おそらくこの答えははっきりしていて、第1の答えは地域だということです。そして第2の答えは人類だということです。この記憶の主体としての地域と記録の主体としての人類の間をどうつなぐのか、ということがアーカイブスの問いだと思ひます。

#### 記録を残すことの価値を確認する

今日のシンポジウムの中で、最初から一貫して記憶・記録を残さなければいけないとい

うことを私たちは言ってまいりました。でも、じゃあ、何でそんなに一生懸命に記録を残さなくてはいけないのか、記録を残すことの価値は何なのかということ、やはり原点に戻ってというか、根本に戻って確認するというか、はっきりさせておく必要があると思います。

私の理解では、記憶を残すあるいは記録を残すことの価値というのは、少なくとも3つあると思っています。1つは記録そのものの価値です。先ほどから今村先生がおっしゃっているように、将来の災害を予測することができる、これも非常に重要な科学的な価値としてあると思います。ただ、それだけではない。例えば、比較的まだ議論されていないことの中に、東日本大震災以前のこの地域のさまざまな映像があります。写真もあればテレビのドキュメンタリーの映像もあります。東北のいろいろな地域の祭の映像もたくさんあります。映画の映像もあると思います。それは地域のアイデンティティに非常に深くかかわる、あるいはこの地域が被災してさまざまなものを失った上でも、将来にわたってそれがもう一回自分たちの地域らしさ、あるいは地域の過去から受け継いできたものを取り戻していく上で、やっぱり文化的に非常に重要なものです。

これこそまさに文化的記憶ですけれども、そういう過去に撮られたさまざまな写真、テレビの映像、映画の記録フィルムとかが波を被って塩水を被って非常にダメージを受けている。それをいかに救済して、修復して、保存して、活用可能な形にしていくのかという問いがまずあります。それもまさに記憶・記録そのものの価値です。

## 人と人、過去と未来をつなぐ役割

そして2番目に、アーカイブの価値というか記録することの価値は、その記録そのものの価値にとどまらないと思うんですが、重要なことは記録するという行為の価値というのがあると思います。神戸の震災のときにも、私は人伝てに聞いた話なので、むしろ他の方が詳しいと思いますが、震災が終わっていろいろ一段落していくと、ある種のアイデンティティの不安といいますか、過去のさまざまな写真を見たり、過去の自分たちの写真と出会う中から、自分というものを取り戻していくことがあったというような話を、何度か聞いたことがあります。つまりある種の癒しという言葉では正確ではないんですが、自分を取り戻して見つけ出していくプロセスの中に、メディアが深く介在しているということです。

冒頭でしたかこのプロジェクトの中で、人と人をつなぎたい、過去と未来をつなぎたい

というふうなお話がありました。私の認識では、メディアというものはそもそもそういうものだと思います。人と人をつなぐというメディアはわかりやすく、ネットも含めていろいろなメディアがありますが、メディアの価値というのはそれだけではなく、過去と未来を時間を超えてつなぐというのが、そもそもメディアというものだとは私は思っています。そうだとすると、メディアとかかわってアーカイブするということは、記録する行為の中で社会がつくられていくといえますか、今回のアーカイビングのさまざまなプロジェクトの中で、結果も大切ですが、結果以上に集団といえますかグループやチームがつけられる、さまざまな地域を越えた協働性がつくられていく、その関係の束そのものが非常に価値があるということが2番目です。

### 人づくりの媒介としてのアーカイブ

そして3番目が、先ほどから出ている活用して生まれる価値ということです。その中で最も大切なのは、最初の話につながるんですけども、記憶する主体をつくる。今の畑さんのお話の中でも、映像を編集したり、制作していく技術を持った主体といえますか人材育成が大切なんだ、というお話がありました。このアーカイブの活用の中で最も大切なのは、やっぱり僕は人をつくるということだと思います。つまり、さまざまなメディアとのかかわりや地域とのかかわりもそうですが、新たなその地域をつくっていくことができる種の人材育成といえますか、人をつくっていく場にしていくということです。具体的には教育ということと非常にかかわってくるんですけども、そういう人づくりの媒介としてのアーカイブなんだと思います。

### 教科書づくりの主体は子どもたち

教科書あるいは教材をつくろうという話がありました。教材をつくろうというのは、いわゆる学校教育の中で使いましょと、いうことはもちろんあるんですけども、それだけじゃなくて、こういう新しいアーカイブ、新しいメディアの形で教科書をつくってみると、決定的に教科書のあり方が変わるんですね。つまりインタラクティブなテキスト、未来型の教科書に変わります。そうすると、だれが教科書をつくるんですかといったら、私は究極的には子どもたち自身だと思います。

子どもたち自身が教科書を編集し、教科書をつくっていく中で、自らがメディアをつくりだしていく能力を持った主体になっていく。メディアをつくることができるということ



は、地域をつくるということができるということです。そういう人づくりというか主体づくりといいますか、その地域のその個人、個人にとどまらず地域の主体をつくっていく、そのためのアーカイブであり、そのための記録・記憶なんだと私は思いますので、何かそういうふうなことに向けて、今日の議論がこれからできればなと思っております。

【司会（徳山）】 ありがとうございます。それでは、ハーバード大学のゴードン先生、はるばる来ていただきましてありがとうございます。まず、1、2部についてのコメントをお願いします。

### アメリカの同僚や学生と震災の支援をしたい

【ゴードン】 ゴードンです。私は日本語が母国語ではないことと、夕べアメリカのボストンから東京に着いて、今朝こっちに来て多少疲れているので、もしわかりづらい表現など使えば、お許してください。

私はもともと歴史学者で、日本の明治期から戦後にかけての歴史を研究したり、教えたりすることが専門で、ハーバード大学にある日本研究所の所長として今も勤めております。その関係で震災が起きた直後、今はその研究をやるときじゃなくて、この大震災について自分なり

あるいは同僚と一緒に理解しなくちゃならない。でもそれだけじゃなくて、何か支援しなくちゃならないという気持ちになって、例えば大学の学生をボランティアとして日本に行かせて、その行き先を斡旋したりすることもやりました。

それと同時に、デジタルアーカイブをつくるとか、あるいは他でつくられているデジタルアーカイブに参加して、より広くそのアーカイブを活用できるようにする、そういう仕事が重要じゃないか、そういう仕事に力を入れたいと思って、ここ半年ちょっと仕事をしているわけです。そのためには、いろいろなアーカイブの企画を進めている方々とお会いして、情報交換とこれからの協力の可能性について話したいと思って来日しました。

ちょうど偶然でしたが、吉見先生に連絡したら、「ああ、それはいいタイミングです。この日に遠野市でこういうシンポジウムがありますから、それに合わせては」と言われて、日程をちょっと変えてここに来ましたのは、ほんとうによかったんですね。だから今日ここにいることができ、もうたくさん学びましたし、感銘を受けました、感動もしました。



1時間ちょっとで13の企画を紹介できるはずはないと思って、最初スケジュールを見たんです。これは何かクレージーじゃないかと思いましたが、でも見事にすべてを丁寧に説明してくださった。このシンポジウムをオーガナイズした皆さんにお礼を申し上げたいと思います。

### アーカイブという言葉に変化が起きている

じゃあ、今日、それを見て得た印象を幾つか述べたいと思います。一つは、アーカイブという言葉です。アーカイブの意味の変化というか革命というか起きていると思います。僕は歴史学をやるからアーカイブそのものになじみを持つんですが、それが静態的な場所であることと、あと、専門家がつくる場所であるという2つの意味では、大きな変化が起きている、あるいは起きたと思います。

我々が考えているアーカイブ、デジタルアーカイブというのが静態じゃなくて動的、ダイナミックなものであります。常に変わっている、常に新しい情報が入るだけでなく、その後、専門家だけがつくるものじゃなくて、いろいろな方々が参加して、素人も地域の人も、ボランティアも、給料を貰っている人もみんな参加してつくっている。そしてつくる側と使う側の区別が少なくなった、あるいは場合によっては消えてしまったことは、今のアーカイブの意味合いだと思います。そして、今日のいろいろな発表の中にそれがはっきりと見えたと思います。いろいろなボランティアがアーカイブをつくっていますから。

### 復興と同時進行でアーカイブをつくる

そしてもう一つは、従来のアーカイブと今回の違いは、従来のアーカイブだと大体何か出来事、それが戦争にしても革命にしても、あるいはもっと地味な、例えば私がよく研究した労働争議にしても、それが終わった後でしばらくしてから資料を集めて、どこかで保存して整理して、そして人々が使い始める。今は、それじゃなくて同時進行でやっているんですよ。アーカイブづくりと利用、それが大きな変化です。

ですから、さっきの話の中にもありましたが、まだ震災が終わったわけじゃないんですね。津波は終わりました、地震も終わりましたけれども、10年間のスパンで復興を考えないといけない。じゃあ、10年が終わってからアーカイブをつくりましょう、というんじゃないんですね。同時進行で復興を計画し、復興を実現しようとしながら、その記録と記憶の場所としてのアーカイブをつくって、その復興のプロセスに役立つためにもなるし、

将来のためにもなるんですね。この半年でアーカイブというのはそのようなものに変身してきたと、頭では理解していましたが、今日、いろいろなこの現地の方々の営みを見て、「あっ、なるほど」と直感できましたので、その意味では非常に感銘を受けました。それが今日の第1部、第2部の報告へのコメントなのですが、あと、うちでやろうとしていることを……。

【司会（徳山）】そうですね、はるばるボストンからお持ちいただいた映像を見ていただきましょう。ハーバード大学でも大変多くのアーカイブがあって、それについての取り組みと、ゴードン先生がこういうアーカイブにしたい、というような試作品を持ってこられています。まずそれを見て、次に関西学院大学の畑さんが、実際に「311まるごとアーカイブ」を使ってこういう防災事典ができますよ、という試作品もつくられてきています。

これから以降は、実際にどういうものがつくっていただけるのか、という討論に入っていきたいと思います。

じゃあ、ゴードン先生、お願いします。

【ゴードン】 ちょっと説明を。今からお見せするのは、うちのアーカイブは今構築中ですが、こういうものをつくりたいのであるユーザーを想定しました。

それは被災地で支援活動をしに来た女性がいて、ある避難所で今年の春しばらく仕事をしました。その経験を記録にして、より広く人々にそのような状況を発信したいと思って



いる、と想定しました。それは、たまたま遠野でこのシンポジウムがある前から想定したもので、大槌という町での話です。ですから、そのユーザーは本当の方じゃなく想定した方なのですが、ただ、見せる映像、写真などは実際のものであります。

（ビデオ放映）

【ナレーション】

その女性は、友人のブログに載せられた震災に関する何枚かの写真を見ていた。2011年東日本大震災デジタルアーカイブからの情報らしい。ある1枚の写真が彼女の目にとまる。そこに映っている教室は、大槌町で3月に通りがかったもので

はないだろうか。あのとき、彼女は避難所に暮らしながら救助活動を行っていた。

何かもっとわかるのではないかと、彼女はデジタルアーカイブ・プロジェクトのウェブサイトを開く。「大槌 教室」と検索してみる。表示されたリストを見るが、それらしいものを見つけることはできない。範囲を広げ、ただ「教室」とだけタイプする。検索結果から写真だけを取り出し、サムネイル表示に切りかえることで多くの画像を一度に見ていく。そして、どうにかその写真を見つけ出す。

その写真に関する情報のページを開くが、なかなか見つけることができなかったのも当然であった。その写真についての情報がほとんど見当たらないのだ。地図とも関連づけられていない。彼女は幾つかのタグを付けることにする。撮影された場所も地図上で明確にする。彼女が加えた情報によって、画面上のその写真の見え方は変わったようだ。大槌町とその関連資料は、今ではより強く結びついている。

関連資料は多かった。大槌町に関するツイートや、震災が町に与えた影響についての報道などだった。気になる書類を目にする。それは大槌町での避難所での生活について書かれた、赤十字による英語の報告書だった。このような資料をもっと見つけられたらいいのに、そして日本語で書かれていたら……。報告書を読みながら彼女は思った、アーカイブにもっと多くの関連情報を加えよう。

彼女はすぐに取りかかる。彼女の心の中には、大槌町の避難所での生活を思い出すときに、決まって表れる一つのイメージがあった。雪が降る中、避難所の外で過ごした時間だ。「避難所」そして「雪」と入力して検索してみる。多くの記録が表示される。イベント画面に切りかえ、震災後の記録だけに絞ってみる。そこにはキャンプファイヤーを囲んで座る住民たちの写真があった。見覚えのあるキャンプファイヤー、あの人たちだ。彼女はその場にいたのだ。私のコレクションをつくろう、彼女は思い立つ。

それらの資料をパーソナルコレクションのタブの中に入れていく。そのコレクションに彼女は「大槌町の避難所での生活」という名前を付けた。これ以外にも救助活動に携わった人による写真や体験を加える必要がある、そう感じた。「投稿する」というボタンをクリックして、彼女は何枚かの写真を載せた。そしてあのときの経験を書き始めた。投稿し終えた後、彼女はそれらを自分のコレクションの中にも納めた。彼女のコレクションは特別に取り上げられるかもしれない。あの大槌町の避難所で暮らす人々のことが、もう少しだけ知ってもらえるかもしれない。

(ビデオ放映終了) (拍手)

【司会 (徳山)】 ゴードン先生、それでよろしいですか。

【ゴードン】 はい。もしなにか説明が必要ですか。

【司会 (徳山)】 もう大変わかりやすいものにできていました。1つのアーカイブスの活用方法の一例を提示していただきました。

【ゴードン】 そうですね。1つだけ付け加えたいのは、要するに私たちは遠くに居て、自分たちで資料を集めたりすることは不可能なわけですね。だからこのアーカイブというのが、複数のほかの企画と提携して初めて可能となります。

だからここで見せた映像、写真だとか報告書は、みんなそれぞれの公開サイトにあるんですが、問題はそれぞれのサイトは将来変わるかもしれませんので、残ることに別に保証はないわけです。でも、「3 1 1まるごとアーカイブ」だとか、「せんだいメディアテーク」だとか、いろいろな所で資料を豊富に集めているわけですから、一緒にいろいろな所にあるものを使えると、より豊富なアーカイブになるんです。そういう望みでこれをつくろうとしているわけです。

【司会 (徳山)】 ありがとうございます。また後半で、ゴードン先生のこのプレゼンテーションも含めて討論していきたいと思います。

では次に、関西学院大の畑さんが、実際にマルチプル防災図鑑というものを試作されましたので、そちらのほうをお願いします。

### マルチプル電子図鑑について

【畑】 まず最初に、NHKの「大科学実験」という番組があります。NHKが10分の科学番組に2,000万円もかけて、アルジャジーラという中東の放送局と共同制作でつきました。まず26本つくって、また今26本つくって、ドイツとかフィンランドだとかアメリカとか、世界のいろいろな所でこれを放送で流したり、学校で使ったりしています。それを学校現場で先生たちが使えるようにしてもらいたいと、関西学院大学にNHKエデュケーショナルから相談がありました。それで、うちにはこういったことをやれるマルチプルな能力を持った学生たちが育っていたので、私たちが編集して、実際に試作は大学院生がつくるといったことでやりました。後ほどまた実際にお見せいたします。

それに続いて、今回の防災のマルチプル電子図鑑というのも、日本による地球への貢献

事業としてこういう形でつくり上げました。これは、実際にiPadでこういうトップ画面にしようというものであります。マルチプル電子図鑑とは、知識の集積から体の反応が伴う知恵が生まれてくる、といったことにつくっていかうと考えております。

これがトップ画面です。この企画書の段階では人為災害の仕組みだとか、自然災害の仕組みだとか、社会の防災力だとか、災害復興支援だとか、災害ナビだとかで構成しています(1番、



2番、3番というのは本番のときには付かない)。そして世界中の地球のプレートがどうなっているのか、これもほとんど防災科学技術研の学術データとして入っています。ここのデータはもう世界の一級品です。

その中に3DCGでクルクルッと動いたりするものがあります。実は一般にはなかなか読み取れないんですよ。上のほうに防災科学技術教育の仕組みだとか、阪神・淡路大震災のときのアーカイブスだとか、原子力事故と放射線リスクだとか、災害年表インデックスだとか、e防災マップ、これは実際にiPadだとかスマートフォンを持っていれば、自分が世界中どこに行っても自分の所在地が特定できて、そこでもし津波だとか大災害、地震が来たときに、どちらの方向にどう逃げるかといったことをナビゲーションしてくれます。そういったことが実は技術的にはできるということですね。

### トータルな技術を一人で出来るように

こういったことをやるためには、まず編集作業というのはものすごいんです。こういうカテゴリというのでしょうか、ツリー構造で、どういうことがどういうふうになるのか、今までのデータベース、学問の考え方というんですか、これをきちっと徹底的に勉強していく。それと逆に、アドワーズ関連で逆引きができるような感じで、今風にどんどんキーワードを入れればそれができる。これがエディティング、編集の仕事なんですね。ここをき

つちりできないとビジュアルの設計図がつかれない、といったことで進めていきます。

マルチプル電子図鑑というのは、これだけの技術が要るんですね。一番左からいえば、トータルプロデュースの技法、図書出版の技法、教科書をつくる技法、編集出版、映像をする技法、電子デザインの技法、プログラミングの技法、eラーニングの技法、子どもの感性発見の技法、学校現場のリサーチ技法、映像制作と編集の技法、それとゲームの技法とか、これを大学2年生から大学院の2年生までの学生に、全部一人で基本的にできるようにする。この中で私はゲームだけがとても強いとか、私は電子デザインのところが強いと特化するのはいいんですが、基本的にこのトータルな技術をちゃんと自分自身が一通りやってみる、という感じの教育を受けさせます。

### 分業制よりもいい物ができる

日本の社会は今まで制作現場は全部分業制なんですね。それが分業制である限りスピードも乗らないし、いい物もつかれないといったことで、こういう形でマルチプル電子図鑑、すでに上のNHKの電子図鑑はでき上がってきております。3月末までにこのマルチプル電子図鑑のファーストバージョンをつくり上げて、4月からだいたい日本全国の100箇所ぐらいで、モニタリングをして使ってもらおうというふうに考えております。

こういうことを今私たちが考えていますが、なんぼ口でしゃべって企画書を出したとしても、なかなかわかってもらえないんですよ。ほんとうは実際こうなるんですよというのを、あるプロデュース的なものができるものをつくり出さない限り……。

### 画期的なeラーニング機能

これはNHKのプロモーションビデオです。企画書だけでは説得できないので、こういう物をつくるんですよ、という4分間ぐらいの物をつくって見せます。

これは実際には、もうサンプル版が3本できた後につくったプロモーションビデオで、今年の7月7日の東京ブックフェアで発表し、僕がコンセプトワークとして講演をしました。8月には北京のブックフェアに出し、10月にはフランクフルトのブックフェアでもこれを出しているところです。使っているこのタブレット盤はアメリカ製ですけども、中身は日本製だよ、日本でもこういうものができるんだよ、ということで打って出ようかなということでやっています。

このアプリをつくることまでは、今の日本では非常にたくさんいますが、このタブレッ

ト盤のところにeラーニングを引くということが、とても難しかったんですね。eラーニングをここに入れるというのは、工学部の技術がなかったらできないので、工学部と僕たち総合政策学部とがコラボレーションしてつくり上げたということです。

eラーニングのものは学校単位で買ってもらって、先生をベースに使ってもらおう。子どもは全部アプリのダウンロードはできちゃいますから、ゲームをするようにこういう物理の世界をずーっとリサーチしていく。だけど、実際にはeラーニングで先生の授業力をどうサポートするのかといったことが、とても重要だということで、eラーニングの機能をこの中に入れました。

今からeラーニングの基本が出てきます。iPadアプリ上でeラーニングが初めて起動することに私たちが挑戦し、ちょうどうちの大学にユタ州立大学から来た先生がおりますので、プログラミングはユタ州立大学で組み上げました。これで出席簿だとかそういったものを全部組み込んでいって、生徒たちの成績管理だとか、例えば40人の学級の中で、先生が質問したときに手を挙げる5人だけがわかって、後の手を挙げていない人たちはみんな授業から脱落していくことがあります、それをそれぞれの人たちが自分のiPadで自分の考えをそこに打ち込んでいく、先生も質問もしていく、先生同士でカリキュラムの投稿をウィキペディアのようにやっていく、こういうような新しい電子図鑑、これをマルチプル電子図鑑という言い方をしました。

### 先生の授業力をサポートする

なぜそんな言い方をしたのか。それは、文章があり、写真があり、グラフがあり、図版があり、それからCGがあり、映像があり、音楽があるという、そういった全部含めたものをメディアミックスというんですか、それをすることができる。この音楽も大学の中で、普通のこのノートブックで全部作曲ができるということで教えております。

先生の授業力をサポートするというのがこれの一番のねらいです。番組提供はNHKエデュケーショナルがし、凸版印刷が開発資金を出して、関西学院大学がこれをつくり上げました。去年の8月からプロジェクトが始まって、実際に開発ができたのが4月まで入っておりましたので、最初のものとはなかなかうまくつくれませんでした。ただ、今回の防災のほうのマルチプル電子図鑑は、大体10日間ぐらいでつくってできました。

(ビデオ上映)



## リアルタイム機能を組み込む

これは東京大学だとか防災科学技術研究所のいろいろ画像データを、今はダミーで使って、五感で体感する全く新しい防災図鑑をつくらうということを考えております。今までの教科書のようなものでは、これからの子どもたちがなかなかそれについてきてくれない。家に帰ればゲームをやっている子どもたちに、ゲームを超えていくようなツールを教育現場が持たない限り、ゲームにはなかなか勝てない。そこで、エンターテインメントのゲーム制作とかが強い、立命館大学のゲームアーカイブセンターと、サイエンス映像系に強い関西学院大学が協働で組みました。この防災図鑑には、すでに世界中のいろいろな情報がリアルタイムでデータとして動きながら出てくる。だからトップ画面に行くと、必ず何らかの情報が動いて動的な感じですずっと出てくる、というふうにリアルタイム機能というものをこの中に組み込んでいます。

## 防災シミュレーションにゲーム機能を入れる

日本中のどこかで、大なり小なりの地震がいつも起こっています。地震災害には、地震・津波災害というふうに津波を入れなければいけないんですが、自然災害といっても5つぐらいのカテゴリーを、今仮置きをしております。こういうことでトータルに考えていく、そして国内外の大きな災害を例に、実際の映像、写真からその被害の大きさや防災の大切さを知り、どう反応すればいいのかということ体を覚えていく。頭で知識を覚えてもいざとなったら動かないので、実際にこのタブレットだとかスマートフォンなどのツールを使って、自分が今どこにいてどの方向にどういうふうに逃げるのか、といったことをこのツールで呼び出しながらできる。これが防災シミュレーション、ここにゲームの機能を入れます。ゲームはアメリカで発明されて産業になっていったんですが、日本がそのゲーム産業を奪い取ったような形になりました。後にアメリカはシリアスゲームといいまして、飛行機のパイロットの離着陸の訓練だとか、消防士の火災の救助の訓練だとかというふうに、より大きなゲーム産業に変わっていくわけですね。

## 自分の位置情報を確認できる

これは、避難路やeマップと連動しながら、自分が世界中、まあ、日本でいえばどこにいても自分がどこにいるのかという位置情報を確認できる。もし地震で津波が起こった場

合には、どこからどういうふうに動いてくるのか、何分の逃げる余裕があるのか、そういったことがこの道具の中に全部入ってくるようにしていこうと。半年ごとにバージョンアップをしてほしい10版ぐらい、3年から5年ぐらいで非常にクオリティーの高いものをつくり上げて、それをiPadであればすぐ言語変換ができますので、この言語変換したものを世界中のいろいろな学校に提供していこう、というように考えております。

### ベンチャービジネスラボを東北につくりたい

こういった災害時に、実際にどう動くのかをつくるには、やっぱり編集の技術というんですか出版社だとか放送局が持っている編集能力というのは、ものすごく重要なんですね。それを得ながら、実際にこれをつくりあげるのは主に大学院生で、徹夜をしながら、合宿をしながら一気に作り上げていく。こういった形態をしないで分業制でやっていると、クオリティーが低いもので、スピードが乗らずにビジネスとしては全く成功しないというようなものになっていきます。

東北の人たちに仕事をしてもらいながらやっていけるような、このソーシャルビジネスのベンチャービジネスラボを東北につくりたい。新興の産業をどうやったら興していけるのかといったことを、3年間から5年間ぐらいのプロジェクトにしたいなと思っております。以上です。(拍手)

【司会 (徳山)】 どうもありがとうございました。

先ほど吉見さんから、人づくりのためのアーカイブというような問題提起もいただきましたので、それも踏まえて議論していきたいと思います。今日、1部で発言された「エフエムわいわい」の日比野さんがおられます。コミュニティ防災の見地からいろいろ世界に情報を発信されてきた方ですので、これから世界に発信していくという点を踏まえてコメントをいただきたいんですが、よろしくお願いします。



### 実話の中に共感、気持ちを重ねられる

【日比野】 そんなに大それたことは言えませんけれども、今日の1部、2部、3部を通じて、釜石の野田市長が言っただけ、物はあったと、言い伝えもあった、そやけど、それをちゃんと受けとめてきたのかっていうその問いかけというのは、私もそれはすごく大事な問いかけだというふうに思い

ました。じゃあ、何でそれを受けとめられなかったのかというところを、やっぱり私たちは考えていかないといけない。アーカイブというの、記録、記憶というの、やはりそのことに立つ必要が私はあると思うんですね。

阪神・淡路大震災以降、神戸でもいろいろな防災、コミュニティ防災のツールがたくさんつくられてきました。でも、そのコミュニティの中で、ほんとうにどれが17年の月日を超えて活用されているのか、またそれが世界に伝わっているのかというのは、今日の話の中で何人かの方からいろいろのキーワードが出ていましたけれども、やっぱり実話の中に人々というのは共感、気持ちを重ねられる。

遠野の本田市長は、釜石の野田市長との電話の話を今日していただきましたよね。私はその実話の部分というのに、やっぱり何か非常に心の中に残るもので、遠野というのは民話の古里だということだけで言うわけではないんですが、やっぱり人間というのは実話を伝えていく、その人の気持ち、人の思いを伝承して、それがやっぱりその地域の文化になっていく。吉見先生もおっしゃっていましたが、私はそのアーカイブということの中には、そのことがやっぱり込められていないと地域の中で使っていけないし、伝承されていかないと、それは世界に広がらないと思います。

#### **被災者の言葉の中に答えがあるのでは**

沖縄のひめゆりの塔では語り部の方がいらっしゃいます。でも、その語り部の方々はいずれいなくなります。ですが、世代を超えて次に若い人たちが語り始めている。人は違ってもそれはやっぱり伝承されていくというのは大事で、今はこういうインターネット、それこそiPadなどいろいろなものが使われて、非常に使い勝手がいいし、どこかに出かけていなくてもそういったものが手に入る、勉強もできる。でも、今日、気持ちと意思ということを野田市長はおっしゃっていましたが、それが入っていないというのは、私はやっぱり物でしかない。言い伝えはあった、物はあった、それだけで終わってしまうというふうに私は思うんですね。

人はだれかの言葉に感動して、だれかの言葉に気持ちを重ねて動いていくという、それは今日ずっと聞いていて、やっぱり今回の東日本大震災で被災された首長の方々や、被災地の方々がおっしゃった言葉の中に、その答えというものがあつたような気がして、私も改めてとってもいい勉強させていただきました。

【司会（徳山）】 どうもありがとうございます。

先ほどの第2部の最後に、遠野市の本田市長のほうから、思い、無念さをどう伝えるのか、単なるデータに終わらせないために、ということを言われましたが、今、日比野さんが言われたことと大変共通項がある話だと思います。

地元の東北大の今村先生、お願いします。

### **想定を上回ったことが今回の我々の教訓**

【今村】 我々もいかに科学的な、また過去の情報をそれぞれの人にきちんと伝えるのか、このことに今、取り組んでおります。例えばハザードマップの例ですが、過去の洪水または津波を各地域でしっかり書いて、過去にここまで来たここが安全です、という提示をさせていただきましたが、そういう想定を上回ってしまったことが今回の我々の教訓です。過去の自然、またさまざまな記憶、また伝承が、それを上回るような自然災害が我々の思わぬところで起きてしまった、という大きな課題を出されました。それにどう取り組むのか。歴史とか、またさまざまな堆積物とか、いろいろな学際研究を重ねるということはあるんですけども、まだまだ解決しなければいけない我々の課題になっています。

### **情報が個人に入ると変化することがある**

もう一つは、ハザードマップの内容が、例えばだれが見てもこういう危険地域、また安全地域というのがわかるんですが、各個人の記憶の中に入った途端、それが実はゆがめられている。これは経験とかまたは知識とかによって、そのまま入る場合もあれば、距離が違ったり、方向が違ったり、また安全情報、歴史的な情報、体験というのが、個人の中に入ることによってそれが変化するということになります。今まで、変化はできるだけ少なくしたほうがいい、できるだけ均一な情報を出すことによって正しい判断ができる、と思ってたわけなんです。その変化というのはいわゆる個人、またその個々の地域の歴史でありますので、それを踏まえた形で我々はまた科学的な情報を使わなきゃいけない、という視点に立っています。

そういうこともあって、今回のアーカイブ、いろいろなデータを人が使うことによってどんどんどんどん進化する、そうすると、今までにない防災情報または安全情報になっていくんじゃないかなと思います。

【司会（徳山）】 ありがとうございます。

それではゴードン先生、今までの議論を踏まえて何かコメントをお願いします。

## このアーカイブは世界のモデルになる

【ゴードン】 1点だけ述べさせていただきます。さっき、このアーカイブという言葉は新しい意味を持つようになってきた、と言いましたが、今までの震災、災害を考えると、例えば16年前の阪神・淡路大震災、あるいは7年前のアジア・インドネシアなどの津波のとき、今日話しているような営みは、技術上不可能であったと思います。それだけ電子世界の発展のペースが速いのです。今日、皆さんと一緒に語り合っている記録・記憶をつくる新しい形のアーカイブのモデルがないわけです。前例もないと思います。ここでやっていることは、この災害の記憶と記録をつくるためにも大事であるだけじゃなくて、それは将来、日本に限らず他の場所へのモデルにもなると思います。その意味でも重要性はあると思います。

私はハーバード大学で「こういうデジタルアーカイブに力を入れているぞ」と、日本研究と関係のない同僚に話すと、「あっ、これはいいですね」と多くの人が共感を持つわけです。それは、彼ら、彼女たちは別に日本に深いつながりを持っているわけではないけれど、日本のこの震災に対する気持ちはもちろん持っています。このようなアーカイブを「やれ、やれ」と言う理由は、今後われわれのときにも、あるいは別なときにもある種のモデルになりますから、ぜひつくってくださいというふうに励ましてくれます。その意味では、ここで皆さんが話しているさまざまな企画は重要だと思います。

【司会（徳山）】 ありがとうございます。世界に類のないような挑戦をしているという、大変重い言葉をいただきました。

では、吉見先生のほうはいかがですか。

## なぜ忘却が起きるんでしょう

【吉見】 まず、先ほどコメントしてくださった日比野さんと私も同感ですけれども、はっきり確認しなければならないことは、アーカイブは必要条件の一つかもしれませんが、単なるツールだとか技術だとかアプリだとかに、取り違えては絶対にいけないということです。また、アーカイブを情報の集積というふうにみなしてしまっただけでは、私はいけないと思うんですね。

じゃあ、「まるごとアーカイブ」でやろうとしていることは何なのか、ということを考えようとしたときに、非常に重要なヒントをこの前のセッションの中で提起してくれたのは、

岩手県立図書館の最初に質問された方が、なぜ忘却が起こるんでしょうかという、ある意味で素朴なんだけれども、本質的な問いを出してくださったと思います。過去の伝承や過去のいろいろな言い伝えがあったにもかかわらず、なぜ忘却が起きるんでしょうかという、この問いがやはり私は本質的だと思います。

### 記憶し続ける社会をどうつくるか

それに対して今村先生は、個人の場合には記憶というのは完全には無くならず残っているが、世代が替わると失われる。あるいは家族が離散したり、家が消えたりすると失われるという、そこが問題なんだということをおっしゃっていました。個人の場合に関してはいろいろな議論があるでしょうけれども、後半でおっしゃったこと、つまり、私たちの社会は家族も核家族ですから、どこまでこのことが家族に伝わっていくかよくわからない。地域のレベルでも過疎化が進み、あるいは地域が非常にばらばらになることが進んで、どこまで記憶が伝承されるかわからない。

100年前と今の間ですら、今議論されているようなことがあったわけで、これからの社会は100年前と今の間以上に、さらに流動化し個別化していく。そうすると、どうすれば忘却ということが起きにくくできるんだろうか、という問いが残るわけです。アーカイブを支えるさまざまな技術は役に立つかもしれないけれども、それだけでは絶対に不十分で、忘却を起こさせない社会というか、記憶し続ける社会というのをどういうふうにつくるか。つまり、社会の記憶術だと思いますけれども、社会が記憶する力というのはどこから生まれてくるんだろうかって、この問いがアーカイブの問いだと思うんですね。

### 世代を超えて記憶を伝えるには

その問いに対して、今回の震災はほんとうにいろいろなことを私たちに教えてくれます。第3部のタイトルが「震災体験を世界に発信」と、あまり僕はこのタイトルは好きじゃないんですけども、何か世界に発信し、という感じじゃないと思うんですね。やっぱりこの記憶を、世界あるいは人類内で共有していくということはどういうことなのか、というのがアーカイブの問いだと思うんです。共有していくそのことが、新しい社会とか新しい人をつくっていくわけで、その新しい仕組みの教科書にするっていうのも、何か新しい技術をつくるということはどうでもいいことで、ある意味ではそれを共有できる社会的な関係を築く、実話の「ワ」は、話の「ワ」でもあると同時に人のワ「(輪)」という、

そっちのワでもあるわけです。そのワをつくっていく社会の仕組みをどうやって築いていくか、アーカイブってそういうことを話さなくちゃいけないと思うんですね。

【司会（徳山）】 世代を超えてどのように記憶を伝えていくかという、また新たな大きな問題提起をしていただきました。それでは、もう時間も迫ってきておりますので、会場の方からのご質問でもコメントでも結構です。専門家の方もたくさん来ておられますので、何かございますでしょうか。

### 津波の碑は町中にいっぱいあった



【佐藤】 防災科学技術研究所の客員研究員をしています佐藤と申します。私は実は今回の被災地・大船渡の出身でして、アーカイブのいろいろな話は大体理解できましたけれども、今の記憶とその対策ということに質問します。

実は大船渡市は昭和35年のチリ地震津波の形跡をだれもが目につくように、例えば電報電話局(N T T)の所にブルーのラインが引いてあって、このときは4.8メートル、ここまで来ました。それから昭和8年のときの三陸津波には、朝日新聞社が建ててくれた碑が町の中にいっぱいあるんですね。それは実際ここまで波が来たんですよという所に建ててあるんです。それから、三陸町の綾里というところに行くと、明治29年のときはこの高さまで津波が来ましたよ、というのが電柱に全部貼ってあるんです。

中には道合といって、その2つの湾から、今回、小友でも起きていますけれども、こっちから上がった波とこっちの湾から上がった波がここでぶつかり合ったという、その38.2メートルという所にも碑が建っていて、なおかつ電柱にブルーのラインがあって、子どもでもだれでもそこを通る人は常に思い起こすことができます。だけど、高台に家移す人は一部にはいましたが、波がここまで来るよということを3つの地震に教えられていながら、今回亡くなられた方が多くいらっしゃる。いろいろな事情で亡くなられたんだと思うんですけども、そういうものが記憶として伝えられていながら、教訓として伝えられていながら、それが結果として自らの行動対応につながっていかなかった。

さっき釜石の市長さんが言っていました「津波てんでんこ」と言うのも、この地方の方言でずーっと子どもたちには言い伝えられています。それから、綾里小学校では5年前に

「暴れ狂った海」という演劇をつくりました。先生が台本を書いて、毎年上演しているんです。これは方言劇でやるものですから、お年寄りの方なんかは涙を流しながら、昭和8年当時を思い出しながら見ているんですよ。そういう教訓が結構あるにもかかわらず、それがなにか十分つながっていかなかった。このあたりを、このアーカイブスとの関係でどう捉えていったらいいのかを、ちょっと教えていただければと思います。

【司会(徳山)】 ありがとうございます。それではまとめてお答えするとしまして、じゃあ、一番で手が挙がった方。

### 国会図書館でのアーカイブの活用法は

【本吉】 国会図書館の本吉と申します。今日は大変勉強になりました。私どもの国会図書館でも、インターネット情報の震災関係の収集なり、さまざまな震災関係のアーカイブスも含めた検索システム、ポータル構築等を検討しており、こういった動きとつながっていきたくと思っています。「311まるごとアーカイブス」は、その発足当初から大変注目し、今日の第1部の説明でアーカイブスの複数形の意味がよくわかり、我々にはなかなかできない現場の地元と密着した動きは大変勉強になりました。

質問というかコメントでもあるんですが、これをどうやって利用していくのかというのは、実は私どもにはなかなか答えられない問題だと思っています。まずは集積して、利用可能な形にして、それを5年、10年というスパンで保存していく。それを皆様方にどう使っていただくのか、あるいはどう使っていただけるものなのかということを考えて、発信なり活用なりはご意見を聞きながら進めていきたいと思っています。

【司会(徳山)】 ありがとうございます。あともう一方、はい、どうぞ。



### 災害の経験を地域文化のレベルに持っていく

【林】 国立民族学博物館の林と申します。今年の3.11のちょうど1年ぐらい前に、神戸で「世界災害語り継ぎフォーラム」という3日間の国際フォーラムをやりました。世界20か国ぐらいから、災害の経験をどう後世に伝えていくかという(災害の経験を後世や他地域に伝え行く)活動をしている方たち、それに博物館とかの関係者たちにも集まって



いただきました。やはり焦点というのは、いかに経験というものを文化のレベルに持っていくか、ということなんです。とりわけ災害の経験を地域文化というものにどう持っていかかというところで、皆さん非常に苦労されていました。

具体的に言えば、浅間山の噴火で被害を受けた鎌原という集落、あそこは1783年の災害経験というものが、世代がもう何世代も替わっていても語り継がれている。毎年の中行事の中にその経験が一つの語りとして、繰り返し、繰り返し行われている。さまざまな行事が絡んで、もう地域文化として根づいている。そこまで持っていくには、もちろん地元の人たちの努力が必要でしょうし、あるいは災害のタイプによっても違うかもしれませんが、こうしたデジタルアーカイブというものを使いながら、それ（データの集積）が目的化するのではなくてどう使っていくかというところで、人々の伝えようという意識とか、あるいはそれをどう受けとめようとする意識の問題が、やはり重要じゃないかなと。先ほどの日比野さんのコメントですとか吉見さんの発言とかに、やはりかかわってくるのかなというふうに思いました。



【司会(徳山)】 ありがとうございます。経験をいかに地域文化としていくかというのは、先ほどの世代間を超えた伝承ということを考える上で、大変リンクした重要な話じゃないかなと。一番最初に質問していただいた、やはり碑ですね、碑というのもまさに同じような同一線上の話かなと思います。

もう時間が来ましたので、最後に短い時間でまとめていただけますでしょうか。最初とは逆にゴードンさんのほうからお願いします。

【ゴードン】 ありがとうございます。あまり付け加えることはないと思います。今日はほんとうに大変勉強になりました。これから皆さんと一緒に、充実した広い意味で、複数の意味を持つアーカイブをつくらせていただきたいと思います。

【司会】 どうも今日は遠くからありがとうございました。(拍手)

じゃあ、吉見先生、お願いします。

### 文化の基盤を何が壊したのか

【吉見】 ありがとうございますと言えば、話が丸く収まるんですけども、何かちょっとへそ曲がり、ちょっと問題発言かもしれないんですけども、今の民博の方がおっ

しゃっていただいた、経験をいかに文化のレベルに持っていくかということがキーなんだと、私も同感なんですね。そうすると、その地域と人類をつなぐ形の文化の基盤というものが何であるのか、ということが問われる。また、その基盤を一体何が壊してきたんだろうか、あるいは何がそれを乗っ取ってきたんだろうか、ということをやはり考えざるを得ません。

### 地域と人類をつなぐ回路があるのでは

もちろん産業化とかいろいろなことがあるんですが、司会の徳山さんは朝日新聞で、先ほどはNHKの話も出ましたし、僕もマスコミの方々といろいろな形で連携したりしています。しかしながらあえて言わせてもらえば、やっぱりその文化、地域の文化を、単に壊しただけではないかもしれませんけれども、しかし乗っ取ってきたというか、非常にその地域の文化とは違う文化で日本全国を支配してきた一つの大きなメディアとして、マスコミがあるわけですよ。それが大新聞であったり、大メディアであったり、NHKであったり、民放であったりと。

そのマスコミの力は少しずつ衰えてはいるんだけど、そうするとそのアーカイブの問題とか、これもニコニコ動画で放送されていますが、じゃあ、次はマスコミからインターネットメディアに行くんだ、ネットの世界だ、という話の人も多いわけでしょう。だけど、それだけでいいのかって私は思うんですね。地域の文化とか、あるいはそれと人類をつなぐということを考えると、やっぱりアーカイブに何か可能性を託すということの中には、マスコミだけでもない、それからネットだけでもない、第三のもう一つの地域と人類をつなぐ回路がこのアーカイブという言葉の中に、あるいは実践の中にはあり得るのではないか。その経験を文化のレベルに持っていくために、果たしてアーカイブあるいはアーカイビングというのは有効なのかどうかという問いを問うていく、考えていく必要があると私は思います。

【司会（徳山）】 ありがとうございます。じゃあ、畑さん、お願いします。

### 記憶と記録は役割が違う

【畑】 記憶そして記録というキーワードが、非常に大事であると話をされていますが、記憶と記録というのは役割が違うと思うんですね。記憶というのは非常に感情的なものだし、それぞれ個人、個人の感情において、記憶の仕方というのは全部違うと思うんです。

だけど一番最初は、人間を軸に置いたときに、その記憶するといったことがとても大事なんです。だけど、その記憶のことだけ置いておいていいのかというと、それには不正確さもあるわけです。そこに論文が書かれたり、ジャーナリズムとして正確なデータをどういふふうを集めたりという形の検証、これは社会的な一つの組織的な動きとして起こってきます。

日本は、実は記憶と記録ということに対してとても優秀な制度というんですか、そういったものを持った国なんですよ。じゃあ、アーカイブというのは記憶と記録で終わっていいのかというと、そうではなくて、そこからクリエイティブな何か新しいアートとか、哲学とか、文学とか、いろいろな新しいコンテンツが、クリエイティビリティでつくられなあかんわけですよ。この物をつくるという創造力という形のこと、実は日本の教育の中にほんとうにちゃんとあったのかどうかといったことが、とても問われるということだと思うんですよ。

### 「忠臣蔵」は民衆の記憶から文学に

例えば、「忠臣蔵」っていったら、日本人であれば何らかの形で誰でも知っているわけですね。だけど「忠臣蔵」というのは、一番最初は江戸時代の人々の民衆の記憶だったんですよ。記憶だったものが記録されていって、それが文学に変わったりしていくわけです。だから、3世代を超えてこれを伝えていこうと思うと、アートというんですか、そういったものに昇華させない限り伝わらない、そして国境を越えて物事を伝えていこうと思ったときには、記憶と記録だけではなかなか伝わらない。それをアートという世界にどういふふうを持っていけるか、ここには創造できる人間というんですか、それがたくさん出なければいけないんですよ。

### 記憶・記録・創造力を同時並行で行う

だから日本は、今まさにこの記憶から記録ということができ、そしてそれをどういふふうにして新しい物語だとか新しい哲学、新しいアートにどうやって創造していけるか、その創造の拠点というのが、実は東北であればこの遠野、柳田國男さんというのは、実はそういうことを実際やっていたわけですよ。記憶と記録だけで終わってなくて、文学といった形のアートの世界にまできちっと昇華できたから、これは遠野市のものすごく大きな財産としてあると。だから、これを先ほどゴードン先生が言われたように、同時進行でしな

ければいけないのが今の現代になってきている。

記憶があって記録をして、記録が十分に集積できたから、じゃあ、創造力の開発をしましようという時代じゃなくて、記憶・記録・創造力というこれを同時並行でしなければいけない。それを担えるのは誰かといったら、吉見先生も言われているようにツールでも、道具でも、システムでも何でもなしに、主体的に動ける、考える人をどうやってこれからこの東日本で、どれだけの創造的な拠点がつくれるかといったところが、僕はとても大事ななんだと。

阪神・淡路大震災のときにはそういう拠点というんですか、人をつくっていくということができなくて、結局補助金が終わったら産業は何も育っていなかったよね、ということになっていった。絶対にそうなってほしくないというのが、僕がこの東北に来ての一つのお伝えしたいことだと思って締めくくります。

【司会（徳山）】 どうもありがとうございました。じゃあ、今村先生、お願いします。

### 被害の検証はていねいに

【今村】 今日の質問として、過去の歴史また教訓として伝わりながら、なぜ今回行動できなかったか、またこれだけの被害を受けたのか、この答えはまだわかりません。この答えを探すためにこのアーカイブが不可欠である、これだけは言えるかと思います。

三陸の歴史だけではなく、例えば1年前にチリ津波が来ました。大津波警報が発表されたにもかかわらず、実態としては小さかったとか、また、3.11の2日前に揺れがありました、しかし、津波が来なかった。そのときの周り状況と、時間帯によって人々の判断があったんだと思います。それを、ていねいにひも解かないとこの回答は出てこない。

### 生活に不可欠な車が凶器になった

特に大切だと思っておりますのは、ふだん使っている車、地域ほど車は不可欠なんですけれども、こういうときにも使ってしまった。単独であればすぐに避難できる、また高齢の方も歩けない方も一緒に避難できる手段である車が、残念ながら今回は凶器になってしまった。渋滞が起こり、またそれによって時間がかかったということになりました。そういう状況をまずはほんとうにまとめなきゃいけない、我々はいろいろな角度で見なきゃいけない。そのためにもアーカイブが必要かと思います。

【司会（徳山）】 どうもありがとうございました。

今まで、アーカイブスについてはもう大変長く、いろいろな角度から議論されてきました。やはりこの大きな東日本大震災を前にして、新たな局面に入っていくんじゃないか、というぐらいのさまざまな問題提起も今日あったと思います。まだまだ議論の緒に立ったところですので、今後さらに「311まるごとアーカイブス」を踏まえながら、今後もこういう機会とかで討論していきたいと思います。

どうも本日はありがとうございました。(拍手)



【司会(坪川)】 徳山さん、それからご登壇いただきました先生方、どうもありがとうございました。(拍手)

今日は大変長い時間、皆様にご参加いただきまして、ありがとうございました。1時から開始して、今は6時ですから5時間の長丁場となりました。ニコニコ動画のアクセス数が4万4,000ということだったので、このまま真夜中までやれば10万人ぐらいになるんじゃないかと思いますが、それはちょっと大変ですので、そろそろ締めくくらなければなりません。今日のシンポジウムの総括としまして、防災科学技術研究所の長坂より、最後の挨拶をさせていただきます。

## 災害文化が機能しなくなっている

【長坂】 皆さん、今日は第3部構成という無謀なシンポジウムの企画に、最後まで多くの方々がお付き合いいただきまして、ほんとうにありがとうございました。

防災の研究分野で言いますと、災害文化の伝承というのがあるんです。何かと言えば、例えば農家が田んぼで水を使って生産する生活、川から流れてくるせせらぎと、多様な魚とか飲料水という便益を享受している部分と、反対に水害のリスクというものとどう折り合いを付けて人類が共生するかという、これはもう人類の歴史における災害文化なんですね。これが先ほど吉見先生も言っていたように、ある種の都市化とか産業化とかいうまた別の文化が生まれてきて、災害文化がうまく機能しなくなっています。



## 新しい地域メディアをつくる

田んぼが埋め立てられ、そこに新しく違う文化の人たちが入ってくる、その人は農家じゃなくてサラリーマンだとすると、水害が起きた所にお家を建ててしまうことがある。それは世代間だけの問題じゃなく、便益とまたそのリスクというものが切り離されてしまうという、ある種の社会が脆弱になってくるということになります。その文化の基盤は地域であり、地域はコミュニケーションがあって初めて成り立ち、それをつないでいくのがメディアだと思うんです。今回、このアーカイブというのはコンテンツでもあり、皆さん方とも同時進行でつながっていくメディアそのものなんですね。このアーカイブの動きからどうやって新しい地域メディアをつくるかは、さまざまな人間関係が育まれて新しい現実をつくり、新しい文化をつくっていくことにあると思うんです。

これは今日、ゴードンさんのプレゼンテーションにもありましたように、コンテンツは自分たちがチョイスして、自分の思いも加えて、それをさらに伝えていくというコミュニケーションを連続していくこと。また、畑先生のデモンストレーションも、そこにローカルの血、具体的に今生きている関係性というものをちゃんと入れていかないと、昔話の語りということだけではもう今の社会、新しい現実の文化というものが形成されないんじゃ

ないかと思えます。

#### 4 団体一緒に検討していきたい

そういう意味では、この情報ツールがいいとか悪いとか、コンテンツか、その活用かというようなことの議論ではなくて、この1部、2部、3部をやっぱりセットで、皆さんと絶えず答えがない世界をつくっていくということが、非常に大切なんじゃないかな、というふうに考えております。

もう長くなりますので、共催ということでサイエンス映像学会と、この「まるごとアーカイブ」の地元の皆さん方と、私たち防災科学技術研究所と、あと学会連携（シンポジウムが明日大船渡市で開催される）という4団体の共催で、本日は大変貴重な場を持たせてと思います。ただ人類と共有していくという話は、今日はなかなか十分にはできませんでしたので、ゴードンさんとも継続的に、このコンテンツをシェアするというだけじゃなくて、人類としてどういう教訓をシェアしていくかというようなことを、ぜひ引き続き一緒に検討できればいいかなと思っております。

ほんとうに今日は、皆さん、どうもありがとうございました。（拍手）

【司会】 ありがとうございました。時間をちょっと超過してしまいましたけれども、これで今日のシンポジウムをお開きにしたいと思います。

先ほど、岩手放送の方から取材を受けました。「今日はだれが主催しているんですか」と言われて、「311まるごとアーカイブスです」と言ったら、「それはどこの会社ですか」と言われたんですけども（笑）、これは会社でも組織でも何でもありません。今ここにいらっしゃる皆さんが「311まるごとアーカイブス」のメンバーですし、これをニコニコ動画で見ていらっしゃる全国の方々、全世界の方々と言ったほうがいいでしょうかね、その皆さん全員が「311まるごとアーカイブス」でございますので、ぜひ、ご協力いただきまして、いろいろな情報を皆さんでアーカイブしていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。お疲れさまでした。（拍手）

— 了 —